



記念講演会

- 会場：文化会館(中ホール)
- 日時：平成22年10月22日 13:00~15:00



西村 浩
建築家・(株)ワークヴィジョンズ代表

建築はまちを救えるか？ 岩見沢複合駅舎のこれから

今日は3つのことについてお話したいと思います。

- (1) 変わりゆく価値・変わらない価値
 - (2) 岩見沢駅舎からまちづくりへ
 - (3) これからのものづくりとは
- ということです。

じつは岩見沢駅舎の設計の前に、まちづくりについて自分なりに考え、取り組むきっかけとなった三重県鳥羽市のプロムナードデザインの設計がありました。そこで痛感したことは、市民自身は、何か特定の物のデザインではなく、その根底では住んでいるまちをどうにかしたいと思っている、ということでした。

鳥羽市に携わっていた頃、「変わらない価値」というコンセプトテーマで岩見沢でコンペが開かれることを知り、自分が考えているまちづくりの提案をしようということで応募しました。

コンペでは、駅からまちづくりへ「まちの未来を見据える舞台として」というコンセプトで、結果的には次の3点の時間軸で提案しました。

- (1) まちとつながり、まちに賑わいをもたらす「真っ赤な顔」(現在)
- (2) 「鉄道のまち」の記憶をつなぐ(過去)
- (3) 建築の枠を超えて未来へつなぐ(未来)

(1) についてですが、もともと個人的に北海道=レンガというイメージがあったこともありますが、いろいろレンガについて調べてみると、木造とRCの間をつなぐ素材として全国の鉄道事業でレンガが使われていたことなどがわかってきました。また、レンガは真冬積もった真っ白な雪にその赤色がよく映えます。ガラスのカーテンウォールにもしていますが、レンガ壁の赤が夜には、ガラスを通して反転して見え美しいだけでなく、たくさんの方がいなくても、何かしているところがガラスを通してでも見えると、賑わいがあるように見えます。

(2) については、今地域による違いがなくどこも同じような街並みになってしまっています。「変わらない価値」を求めて物をつくるとき



岩見沢複合駅舎
2009年グッドデザイン大賞受賞、2010年日本建築学会賞(作品)受賞

考えるべきこととして、まちの記憶を残す、ということではないかと考えました。そこで、岩見沢の「鉄道のまち」としての記憶を引き継ぐものの1つとして、古レールをサッシの枠に使用するなどの試みを行いました。ただ、産地や年代が異なるだけでなく、レール自体炭素量が多く、溶接1つ難しく、試験溶接するなど、実際は大変な作業となりました。

(3) については、ものをつくっている人と使っている人がつながっていないことを感じていたので、解体する駅舎に感謝を示す「ありがとう駅舎」プロジェクトなど、いろんなイベントを行いました。今では新駅のセンターホールでは「お弁当を食べる」「スケッチをする」「孫をつれ電車を見にくる」「サテライトキャンパス」としての利用や、「コンサート」なども開かれています。

この岩見沢複合駅舎の設計を通じて思ったことは、「箱物」といわれ逆境にある「建築」には、プロセスや関わり方次第ではものすごいパワーがある、ということがわかったことでした。

そもそも街を「つくらないといけない」状況ということがおかしいと思っています。昔はまちをつくろうと思わなくても自然にできていました。将来は「まちづくり」を言わなくてよい社会にしたいし、そういう活動をこれからもしていきたいと思っています。(講演要約)



ロビーに展示された模型